

# 経済学史上におけるリカアドウ正統

小林 時三郎

## 一

われわれが経済学発展の歴史を顧みるとき、そのなかを流れるさまざまな学派のうち、リカアドウ経済学ないしリカアドウ学派の伝統の重さに注目せざるをえない。

それは、リカアドウというその中心人物の輝しさ、かれが十九世紀初頭において享受していた国際的威光、公けの討議における傑出さに思いおよぶとき、当然の帰結であったといえるかも知れない。シュムペーターによれば、このリカアドウを中心とするグループこそは、ひとりの師匠とひとつの学説と人間的結合があり、ひとつの中枢陣営(hard-core)があり、勢力範囲があり、外縁圏(fringe-end)があった真正の学派に値いするものであった。<sup>(1)</sup>その中枢陣営には、リカアドウを中心としてジェームス・ミル、マカロック、およびド・クインシー(De Quincey)がもつとも近く位置を占め、このうち特にマカロックはリカアドウ学説の無条件的な追隨者としてかつ戦斗的な支持者として活躍した。そしてウエスト(Edward West)がやや離れた周辺にいた。<sup>(2)</sup>こうして、リカアドウのもろもろの著書論稿は、経済学史上、正当なあるいはそれに値する以上の取り扱いを受けてきた。ケーンズによれば、リカアドウはあたかも異教審門所がスペインを支配したと同じように完全にイギリスを支配した。<sup>(3)</sup>

(1) J. Schumpeter, *A History of Economic Analysis*, p. 470. 東畑訳・(三)・九九〇頁。

(2) シュムペーターは、この四人によって中枢陣営が構築され、かれらによってリカアドウ経済学が推進されたとみる。しかし、ゲリテイはつぎの理由によってこの見解に反対を表明している。たしかにクインシイは、かれの全生涯にわたって、リカアドウへの讃美と傾倒に終始した。これはかれのマルサスへの（しばしばセイに対しても）はげしい批判と著しい対照をなしている。かれは経済学上の主要著作においてリカアドウの分析装置を利用しているけれども、しかしそれによってもたらされた諸帰結は、リカアドウのそれよりもむしろマルサス派のそれに類似している。穀物法の影響、農業の改善をこえる人口の傾向、およびセエ法則にかんする見解において、リカアドウと見解を異にしていた。それゆえに、価値および分配の静態理論に限定しない限り、クインシイはリカアドウの中枢陣営には属しない。政策または経済発展の問題に目を転ずるや、かれはむしろマルサス派に属しているとゲリテイは指摘している。ただし、その結論にはそういう傾向があるとしても、リカアドウ経済学の推進なりし普及宣伝の面からみれば、シュムペーターのように解してよいではないか。James A. Cherity, Thomas De Quincey and Ricardian Orthodoxy, *Economica*, 1962, August, p. 269, 271, 274. これらの中枢陣営のうち、真の意味のリカアドウの両側にはジェームズ・ミルとマカロックがいた。前者はリカアドウ理論の生成に後者はその宣伝と普及に大きな役割を果たした。この意味でこの二人はリカアドウの「唯一の二人の弟子」(only two disciples)であった。M. Blaug, *Ricardian Economics*, 1958, p. 46.

(3) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest, and Money*, 1936, p. 32. 塩谷九十九訳・四〇頁。

リカアドウはいわゆる机上の学者 (bookish scholar) ではなかったし、かれの経済学はけっして経済学のテキストとして書かれたものではなかった。かれの著作はいずれも当時の経済的現実を素材として思索され構築されたものであった。すなわち、かれの経済理論は現実を解く鍵を明らかにする努力のあらわれであり、この鍵をもって現実を開くならば、社会の発展と幸福とがもたらされるという意図と性格をもっていた。通貨の問題にしても、穀物法の問題にしても、あるいは租税の問題にしても、かれの周囲には解決すべき数多くの重要問題があった。もとよりリカアドウ以外の経済学者も、こうした現実への提言という点においてかれに劣らず多くの提言を与えたとしても、リカアドウ

の提示した議論の有效性にははるかにおよびなかった。もっとも、リカアドウが経済学的思索を本格的にはじめたのは一八一〇年前后であった。ところがスミス『国富論』（一七七六年）とこの頃にいたる期間の経済学史の文献の大部分は、それに先立つ時期と同じように、時論的ないし実践的諸問題を扱うパンフレットから成り立っていた。その項注目に値する経済理論の数少ない議論は、ゴドウィン（W. Godwin）やマルサスやラウダーデイル（Lauderdale）の名と結びつくものであった。<sup>(1)</sup> かれらの提言に比べると、リカアドウの問題解決へのアプローチはいっそう見事でありまたはなやかな注目をひき、かつ喝采を博したのであった。リカアドウは直接的かつ実際の意義をもつ截然たる結論を与えて指導的役割を果たしたのである。それだからとて、リカアドウは、なにか特定の事実にこだわっている實際家肌ではなく、その理論構成において純粹嚴密であり、かつ抽象的であった。かれは豊富な實際的経験の持主であったにもかかわらず、あらゆる非本質的な細目から抽象し、本質的、一般的真理または原理に集中または焦点をあわせるといふタイプの人間であった。この点においてかれの師スミスが書斎人でありながら實際的事例を多くもちだすのとまさに好対照をなしていた。また、リカアドウは、ミルによれば、「やさしい顔つきと親切な物ごし」をした「内気なひと」であったが、<sup>(2)</sup> 論争的才能にたけていた。この点はマルサスとちがっていた。リカアドウは生まれながら鋭利な推理力の持主であったが、自分と異なった思考方法で論理を展開するひとびとと妥協するという性向はまったくあわせていなかった。このリカアドウの論争的性格には、まったく普通の程度をこえて、素早さ、迫力、および心からなる鄭重さが組みあわされていた。こうしたことがからみあって、後にリカアドウ学派と称せられるグループの中心的存在となるにいたったのである。

(1) 十九世紀初頭の十年間に公刊された重要な経済書をあげるならはつぎのものがあつた。Royd, Letter to Pitt, 1801, William Thomas Thornton, Paper Credit, 1802, Brougham, Colonial Policy, 1803, Lord King, Bank Restriction, 1803, Lauderdale,

Public Wealth, 1804, Parnell, Currency in Ireland, 1804, Foster, Commerical Exchanges, 1804, Lord Liverpool, Coins of the Realm, 1805, Macpherson, Annals of Commerce, 1805, Robert Torrens, Economists Refuted, 1808, Thomas Chalmers, National Resources, 1808. など これらのうちリカアドウがソートンおよびリヴァプールの著書を読んだことはその手記に明らかである。 Minor Papers on the Currency Question 1809—1823. By David Ricardo, Edited with an introduction, and notes by J. H. Hollander, 1932, pp. 17—33

しかし、シユムペーターは、当時の経済理論に対するリカアドウ学説の影響にかんして若干の疑問を投げかけている。<sup>(1)</sup> 事実、リカアドウの死（一八二三年）におくれること二年にして早くもベーリー (Samuel Bailey) がリカアドウ経済学攻撃の火の手をあげたし、また一八三一年に出版された小冊子にもリカアドウ経済学の凋落を語ったものが見出される。<sup>(2)</sup> それがゆえに、一八三〇年頃をピークにしてリカアドウ学派の終焉と理解することも可能であらうし、またリカアドウの影響は、地代理論とか国際貿易理論といった経済学の一部門においてのみ命脈を保っていたと解することも可能であらう。<sup>(3)</sup> しかし、それにもかかわらず、その期のほとんどすべての経済学者は、なんらかの意味においてリカアドウ的伝統の支配下にあった。たしかに一八三〇年代にはリカアドウ学派解体の決定的徴候があらわれた。しかし一八四〇年代および五〇年代に入るにおよんで強力なリカアドウ経済学の復活がみられ、これが決定的崩壊を延期するにいたったのである。否、かれの理論が財界や政治家あるいは学界に認められたのみではない。論争はやみ、他の見解は完全に姿を消して、ふたたび論議されることすらなくなった。それゆえこそ、スタンレイ・ジェボンズが、リカアドウミル学派の構造と影響とに対して、效用理論の武器をとって、怒りを爆発させるのに十分の理由をもっていた。かくて、リカアドウの経済理論は、ウオターローの斗い（一八一五年）の頃から普仏戦争（一八七〇年）の頃にいたる期間において、イギリス経済思想に対して圧倒的影響を与えていたといつてよいであらう。<sup>(4)</sup>

(1) Schumpeter, op. cit., p. 478. 東畑訳・一〇〇七頁。

(2) C. F. Cotterill, *Examination of Doctrine of Value*……, 1881. Samuel Bailey, *Critical Dissertation on*……Value, 1825. 鈴木鴻一郎『リカアドウ価値論の批判』(世界古典文庫)。コッテリルの右の著書からセリグマンが「なお若干のリカアドウ学派のものが残っている」の句を引用している。なお、リカアドウ批判の著名なものとしてサミュエル・リード(Samuel Read)がいる。かれは一八一九年にマカロックの剽窃を責め、一八二九年の『可譲財産あるいは富への諸根拠にかんする一研究』(An Inquiry in to the Natural Ground of Right Venable Property or Wealth)で「リカアドウ学派」の「ドグマとパラドックス」に反対した。平瀬巳之吉訳『忘れられた経済学者』(一九五五年)・五四―五六頁、八七―八九頁。

(3) (4) M. Blaug, op. cit., p. 1, 3. J. M. Keynes, op. cit., p. 32. 塩谷訳・四〇頁。なお、テーラーはこの点につきの要約を与えている。「経済理論のこの体系(リカアドウ)および政府の「健全な」経済政策の基準は、この分野において——なかなしくイギリスにおいて、しかしまた大いに、少なくとも専門経済学者のあいだにおいて、あらゆるまたはほとんどあらゆる西ヨーロッパ諸国において——一八二〇年代から一八七〇年代にいたるまで支配的な正統であった。」  
O. H. Taylor, *A History of Economic Thought*, 1960, p. 172.

リカアドウの生前においても反リカアドウ派の経済学者はもろろい<sup>(1)</sup>た。しかし、おそらくは、これらの反リカアドウ派の経済学者は、リカアドウほどの個人的威光をもっていなかった。それゆえに、その当然受けるべき評価を与えられなかったであろう。そして、リカアドウ経済学の時代思潮への影響の強さのみがあらわれてくる。とくに一八二〇年の頃からリカアドウの死(一八二三年)にいたる時期にこの傾向は著しくなる。かのトーク(Thomas Tooke)に率いられた「商人の請願」(Merchant Petition)が一八二〇年下院に提出されるや、より自由な内外商業政策を要望する一般的運動が刺激を受け、盛りあがりを示した。「自由貿易」(free trade)が街の流行語となるにつれて、産業資本のための貿易自由を主張するリカアドウ経済学はいよいよ尊敬を受けるにいたった。そして経済学者はこの科学の新しい立場を改めて認識するにいたった。リカアドウの経済学は、その内面的論理の首尾一貫性のゆえに、反

リカアドウ学派の経済学に大きな優越性をもっていた。しかも、今やかれらの経済学は時代の波に乗ったのである。それゆえに、リカアドウの追隨者たちは、経済学の正しい原理は、すでにかれによって発見し尽され、残された仕事はたんに学問的にはかれの学説の体系化にあり、実際的にはその宣伝や実践にありとなした<sup>(2)</sup>。そして、かれの経済学は、熱心な社会改革家の一グループの称導した新しい哲学運動の準公認の経済学でもあった<sup>(3)</sup>。このグループはその数において少なかつたけれども、つぎの時代のマルクス経済学者の特有な目的にとつての推進力と結合力とをもっていた。経済上の分配をもつて現在の社会秩序の中心点とみなすという意味において、リカアドウの経済学は社会主義の生成に影響を与えるにいたった。さらに、時代をへだてた間接的な追隨者についても特別幸運であつた。ジョン・ステュアート・ミルは、あくまでも自分の小仕時におけるリカアドウ学説への帰服を強調し続けたし、十九世紀後半から今世紀初頭にかけてイギリス経済学の指導的役割を果たしたマーシャルも、そしてエッジワース (F. Y. Edgeworth) さえも、リカアドウ経済学およびミルの『経済学原理』 (Principles of Political Economy, 1848) に傾倒<sup>(4)</sup>、かれらの経済理論構築の重要な礎石のひとつとした。

(1) 反リカアドウ経済学の中心はマルサスであり、これに密着するものにローダーデル (James Maitland Lauderdale) がいいた。かれはむしろマルサスの先行者でもあり、そして同時代人でもあつた。マルサスは、価値理論、貿易政策、および総体需要の理論の分野でかれに大いに依存した。この二人は経済学史上 anti-Ricardians の中心的存在であつた。このほかブキヤナン (David Buchanan) は Caledonian Mercury の編集者としてマカロックと論戦を交えている。マカロックは怒つて、リカアドウに対して、『原理』におけるブキヤナンの著書の引用を差控えるように迫つたが、さすがにリカアドウはこれを容れなかつた。マルサスが自由貿易および供給過剰について異説を立てたとき、当時のあらゆる指導的著作家たちは隊伍を組んで共同戦線を張つた。セエは一八二〇年の『マルサスへの書簡』 (Letter to Malthus) においてこの戦線を指導した。トレレンズは一八二一年『富の生産論』 (Essay of Production of Wealth) において市場の法則を主張し、マルサスの抗議を「曖昧で、誤りに満ち、かつ首尾一貫しない」と一蹴した。マカロックは、マルサスとシスモンディとを同

列に並べておいてこれを攻撃した。かれはかれの「機械と蓄積の影響」(Effects of Machinery and Accumulation)においてこれをなしたがかれはこれを後に『原理』(一八二五年)に収録した。ジームス・ミルはまたかれの『綱要』(the Elements)において、消費は生産とともに必然的に拡大するという原理をしつように弁護した。かれはその第二版(一八二四年)においてマルサスの理論批判の一節を設けた。一八二四年に、『季刊評論』(Quarterly Review)一月号は「経済学の新派の体系」にしんらつな批判を公表した。これは一般的過剰生産が可能であるという主張によってマルサスの説を認めるという性質をもっていた。これに対してJ・S・ミルは一八二五年の『ウェストミンスター評論』(Westminster Review)におつて答弁を与えた。M. Blaug, op. cit., pp. 41—43. Morton Paglin, Malthus and Lauderdale, 1961, pp. 13—14.

(2) マカロックは「一八三一年」のように結論した。Edinburgh Review, September, 1831, p. 97.

(3) J. S. Mill, Autobiography, p. 100. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』・九三頁。なおこの頃注目すべきことは「一八二一年の『経済学クラブ』(Political Economy Club)の設立であった。このクラブの創立者にはJ・ミル、リカアドウ、トークおよびトレンズが名をつらねていた。このクラブはたんなるおしゃべりの会以上のものであった。なんとすれば、このクラブはその組織のなかに「経済学の健全な見解」を宣伝布教するための会員を加えていたからである。リカアドウおよびその徒は、このクラブの議事をわがもの顔に支配することができなかった。まもなくマルサスもシーニアも、またプリンシプ(Princep)も会員に加えられた。そして第二回目の会合において議題となった主題は「一般的な商品過剰はありうるか」であった。この会の目撃者は、どんな問題についても二人の会員が同意するのを発見するのが困難であったと証言した。マーレット (John Lewis Mallet) の日記によれば、ほとんどがたいがいのはいに、リカアドウとミルが一方の側に立ち、マルサスとカザノヴ (Cazanove) がその反対側であったという。そして、トレンズとトークは、しばしばその両者と見解を異にしたし、プリンシプはいわば攪乱者の役割を果たした。一八二三—二五年頃になると、経済学は自由貿易学説と固く結びつくようになった。一八二一—二二年の穀物法論争ではマルサスのことばもしばしば引用されたけれども、一八二〇年代中頃になると議会の論争はリカアドウの用語のみが引用されるようになった。たとえば、パーネル (Henry Parnell) は、一八一三—一五年の論争では保護政策の強硬論者であったが、今や自由貿易論者に改宗していた。かれは一八二六年の議会において自己の過去における不明を恥じた弁明をおこなった。こうして、Political Economy, Ricardian Economy, Free Trade の三者は離すべからざる三位一体の關係をもつようになった。

ところで、リカアドウの時代の経済理論の潮流を検討するばあい、経済学の専門家の著作をもっぱら取り扱う大衆雑誌はなかったことに注目しなければならない。経済学はなお主として、実務家 (men of affairs) の領域であった。事務家、議員、文筆家、新聞記者、社会改革家、およびパンフレッターがそれであった。したがって、経済理論の影響を評価するためには、出版界の領域をも吟味しなければならない。当時ある専門的理論が一般に受容されていたということは、指導的な少数グループのひとつとの理論がおよそ四、五万程度のイギリス読書階層のあいだに受容されているということを意味していた。当時イギリスの指導階層にとってもっとも重要な定期刊行物は『エデンバラ評論』 (Edinburgh Review) であった。この雑誌は一八〇二年の創刊に成るが、創刊号は七五〇部で即座に売り切れとなつた。創刊号はその後もしばしば版を重ねた。第二巻および第三巻の七版は一八一四年および一八一五年にあらわれた。ライバルである『季刊評論』があらわれてもその発行部数にはなんの影響もなく、むしろ増加していった。一八一四年にはその発行部数はおよそ一万二千部、一八一七年および一八一八年には一万三千部に達していた。その背後にはおそらくこれに三倍ないし四倍する読者層をもっていた。<sup>(2)</sup> 教養を誇示する当時の紳士たちの書斎の書架にはこの雑誌が飾られてあり、その第一巻を買いそねたひとつのために再版をせねばならぬほどであった。この雑誌は新しい社会科学である経済学的重要性を強調し、当時の経済的論議に多くのスペースを割いたのであった。そして経済原理についての指導的論議を特色づけたものはまさにこの雑誌であった。ナポレオン戦争期およびそれに続く時期において、イギリス経済思想および経済政策に対するこの雑誌の影響は想像以上に大きかった。この雑誌は当時の知識層に対して、経済学上の古典、論争の要点、および議会報告についての簡潔な説明を提供するものであり、いわば「



リダーズダイジェスト」の役割を果たしていた。その後多くの雑誌が発行されたが、そのいずれもこの雑誌ほど経済問題に重要性をおかなかったしまた権威もなかった。その評論は十九世紀初頃における経済理論の発展の研究にとつて欠くべからざる源泉となるものである。

(1) この傾向は一八七〇年代にもみられたとハチソンは指摘する。その頃にも学者と政治家のあいだに、理解、用語、およびアプローチの上に大きなへだたりはなかった。しかし、その頃を境にして共通の知的領域は徐々に解体しはじめ、つぎの半世紀において全面的にその構成を変えるにいたった。こうした共通性は実践的な強さの源泉であるが、同時にそれはもっとも弱い弱点および曖昧さのひとつの源泉でもあった。T. W. Hutchison, *A Review of Economic Doctrines, 1670—1929*, 1953, p. 2 長守善訳・(上)・四頁。

(2) Bernard Semmel, *Occasional Papers of T. R. Malthus, 1963*, p. 6. F. W. Fetter, *The Authorship of Economic Articles in the Edinburgh Review, 1802—47*, p. 233.

リカアドウがイギリス知識層の注目を引いたのは主としてこの雑誌によるものであった。かれの経済理論は、この雑誌をつうじて、専門家、商人、工場所有者、および地方の地主たちのあいだに、次第に伝播していった。いわゆる *Ricardian Orthodox* の主要な源泉となる役割を果たしたのであった。<sup>(1)</sup> しかしこの雑誌にはリカアドウの論敵マルサスも数々の論文を寄稿している。これはおそらく五論文であったであろう。このことはやや奇妙に思われるかも知れないけれどこの雑も、当初この雑誌はマルサスも親しい関係を保っており、かならずしも敵対関係にはなかった。それは誌の創刊者のひとりホーナー (Francis Horner) がマルサスとも親交を結んでいたからである。もともとこの雑誌の創刊者はスコットランド哲学の影響を受けており、その寄稿者のほとんどは政治上ではホイッグであった。しかしそうだからとて、この雑誌がホイッグ党の機関誌であったというわけではなく、その創設者は、文学上の評論はもとより、議会改革、外交問題、金融政策の分野においても自由に発言した。かれらはすべて若かった。その創刊に預かっ

たスミス (Sydney Smith) は三才、一八二九年まで編集を担当したジェフリー (Francis Jeffrey) は二九才、そして当時の問題にもっとも経済学的立場から関心を寄せたホーナーはまだ二四才にすぎなかった。かれらの公的問題へのアプローチはアダム・スミスの精神に基づいていた。死せる伝統に対する反感、競争の原理に対する信頼、政策の基準を人間福祉の向上に資しうるや否やにおく点、このすべての点においてかれらは共通していた。<sup>(2)</sup>

(1) B. Semmel, *op. cit.*, p. 14.

(2) F. W. Fetter, *op. cit.*, p. 233.

他方、リカードとマルサスの交遊は一八一一年六月にはじまっている。かれら二人は終生友情に満ちた交遊を続けていたけれども、自己の是と信じた経済学上の真理についてはけっして所信を枉げることはなかった。しかし一八一五年頃を境にして、『評論』のこの両者に対する態度は次第に変貌してゆく。すなわち、リカードへの声援とマルサスの排撃という性格がきわめて濃厚となり、その過程においてリカードウ経済学の優位性が決定的となる。これに反して、マルサスの影響は凋落し、リカードウ学説の戦斗的な支持者であったマカロックのマルサス攻撃がこの雑誌において異彩を放ついた。この理由はいったいなんであるか。

一八一五年を中心とする穀物法問題以前の時期においては、経済学上の理論をめぐる意見の食い違いはたんなる見解の相違として先鋭な形をとらず、むしろこの点については一般に寛容であった。はじめイギリスの経済学者の多くは重商主義やフィジオクラシーの経済思想の影響を受け、明瞭な独自の立場をとるというよりも、むしろそれらの学説の断片を組みあわせるという折衷的なものが多かった。あるものは農業的偏向をもち、またあるひとは商工業の支持者であった。しかし、ナポレオン戦争の過程をとおして、イギリスの商工業が飛躍的に発展していった。この戦争の一般的状态は、地主、農業者、住宅所有者、および企業家への富の多年にわたる移転の連続であった。繁栄に

赴きつつあるこの商工業者の利益を、穀物法の支持者である農業保護論者たちに立ち向かわしめたものは、この新しい経済の発展であった。リカアドウはこの商工業の側に味方し、マルサスは農業保護の側に回った。その理論の根底にあるものは、高い穀物価格は豊富と高賃金に結果するのであろうかということであった。低い穀物価格は果して望ましいものであるかということでもあった。要約して言えば、この問題は一方における地主資本と商工業資本の対立の問題であった。「産業資本と貴族的土地所有との斗争」の理論的表現であった。<sup>(1)</sup>

(1) K. Marx, *Das Kapital*, s. 14. 長谷部訳・第一部上・七八頁。

こうした対立の直接のきっかけとなったものは穀物法 (Corn Laws) であった。新穀物法は一八一五年三月議會を通過し、その月の二十三日には国王の勅許を受けた。この法は一クォーター当り八〇シリングに上るまでは、いっさいの穀物、穀粉および食用肉の輸入を禁止することを主たる内容とするものであり、地主階級を独占的に保護する内容をもつことによって「地主独占法」と呼ばれたものであった。マルサスはこの穀物法に関連して二つの小冊子を執筆した。その第一は一八一四年の『穀物法および穀物価格騰落のわが国の農業および一般的富におよぼす諸効果にかんする諸考察』であり、その第二は一八一五年二月三日の『外国穀物輸入制限にかんする見解の諸根拠』であった。<sup>(1)</sup> かれの意図したところは、「もっともげんみつに不偏不党の立場において、われわれの現在の立場における事態において、それぞれの政策の長所ならびに短所と思われるもの」を叙述することに努めることにあった。かれはその第一論文において見事にその目的を果した。かれの友人たちのあいだでは、いったいマルサスがどちらの味方をしているのか意見が一致しないほどであった。事実、マルサスは、このときには未だに自由貿易か保護貿易か相対立する主張に對してはつきりした裁断を下すことができなかったのである。しかしマルサスは一八一五年の第二論文でかれの立場をはっきりさせた。すなわち、マルサスは、新興階級の穀物法廃止の執拗な主張を念頭に入れつつ、なお土地所有者

階級のために輸入穀物に対する一時的関税に賛成であると旗幟を鮮明にしたのである。この穀物制限政策は穀物価格を騰貴せしめ、延いては地代を増大せしめるが、それはやがて国民の経済的發展を促進するものであると信じたのである。これに対してリカアドウは反対の態度を表明する。すでに一八一四年の春以来、書簡をつうじてマルサスとのあいだに穀物法論争を展開しつつあったリカアドウは、わずか二、三週間後の一八一五二月二十四日に、『低い穀物価格が資本の利潤におよぼす影響についての一試論<sup>(3)</sup>』を公刊して、輸入制限の不適当を示し、同時にマルサスの二つの近著を批判する立場を明らかにした。こうして、穀物法をめぐる二人の立場は明瞭に対立するにいたったのである。地主的保護政策論者マルサスと産業資本の立場に立つ自由貿易論者リカアドウとのこうした熾烈な論争は、この渦中から二つの相対抗する原理を次第に結晶させてゆく。Ricardian Orthodox は、この穀物法論争の過程をとおして、次第にその形を整え、陣営を強化し、やがてヘゲモニーを掌握する。あたかもそれは地主勢力の后退と産業資本の勃興とを象徴するかの如くである。すなわち、リカアドウ経済学は「政治経済学」を代表するものであるとともに、それは自由貿易と固く結びつくにいたったのである。かくて、リカアドウを取り巻く人たちは、経済学にかんする正しい原理は、かれによって発見し尽されたとの態度をとり、かれの学説の宣伝に主として力を注いでいった。そして、リカアドウ経済学の矛盾は次第に隠蔽され、その体系化と民衆化の進展にもかかわらず、次第に歴史の現実から遊離していく。

(1) Observations on the Effects of the Corn Laws, and of a Rise or Fall in the Price of Corn on the Agriculture and general Welfare of the Country, 1814. The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn, intended as An Appendix to "Observations on the Corn laws," 1815, 楠井隆三・東嘉生訳(昭和二十七年刊)。

(2) 前掲訳・一一頁。当時の事情については、拙著『マルサス人口論綱要』(未来社昭和三十四年刊)・一三二—一四〇頁

(c) An Essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock, 1815.

ところで、一八一五年の穀物法論争以前においては、経済学上の意見の相違は、それがきわめて先鋭なものであったとしても、それは未だアカデミックな性格を保持していた。『エデンバラ評論』もマルサスの見解を発表するのにきわめて寛大であった。ホイッグとしてまた経済者としてのマルサスの地位はこの雑誌にとって少しも危険にみえなかったのである。マルサスを経済学正統に対する異端者としてこれを破門する考えをいだくことはなかった。経済的思考は自由であり議論の余地はなお開かれていた。地主階級に重要性をおく経済学に好意を示す寛大さをもっていた。するどく分れた陣営が形成されたのは、一八一五年を前後とする穀物法論争をきっかけとしてであった。

この雑誌がその態度を決定すべき時期は、一八一五年の穀物法擁護のマルサスの『諸根拠』の出版とともにきた。

この問題についてこの雑誌の政策決定者であるジェフリー (Francis Jeffrey) とホーナーは見解を異にした。ジェフリーはすでに一八一四年五月十二日付マルサス宛書簡で、マルサスは、「この問題について私の考え方に近いが、ホーナーはもっとスミスのです。」と述べてかれらの見解の相違を報じている。<sup>(1)</sup> 他方のホーナーは、一八一五年一月三

〇日付マレイ (John Murray) 宛書簡で、若干の皮肉をこめて、「地主たちのかちえたもつとも重大な改宗者はマルサスです。」と責め、さらに、「もつとましましたはもつと良識のある判断というものはありませんし、それが私をちゆうちよさせる唯一の理由なのです。」とつけ加えている。<sup>(2)</sup> ホーナーはかならずしもマルサスに批判的ではなかった。六年前かれは、人民を高価に養うことの重要性についてのマルサスの新見解について、「パラドックスの外観」をもっていると注釈を与えたが、しかしかれは、「もしあるとしても、私はその誤まりを暴露していません。」と好意的につけ加えた。そして一八一五年においてさえ、ホーナーは、「異端からの改宗についてまだある希望がもたれう

る人間として私を扱って欲しい」とマルサスに書き送る義務を感じたほどである。しかしこの希望は、政党間および階級間のあつれきや論争が経済理論の形態をとるにつれて、まったく望みをたたれてしまった。商業階級に同情的なホーナーは、この書簡のなかで、「郷紳たちの才覚による図々しいかつでしゃばりの調整根性」についての非難をつけ加えた。『エデンバラ評論』は、一八一五年二月号(五八号)において、穀物法にかんするマルサスの見解について批判的論評を発表した。これはマルサスの『諸考察』と『諸根拠』とを対象としたものであり、この誌上十五頁にわたって展開されている。論調は比較的平静であつたとしても、それを貫くところのものは、「社会の大衆は、土地所有者および農業者の利益または救済のためにまたは農業の保護のためにさへも、課税されるべきものと思われまい」という趣旨のものであつた。ジェフリーはこのとき、経済問題にかんするかれの判断によって、マルサスへの好意とかがジェームス・スチュアート(James Stewart)から吸収した地主利益への同情とを放棄した。しかし、この論評は比較的平静であつたから、この程度ならばマルサスとの多年の友情を傷つけるものではないと考えたかも知わらう。

(1) B. Semmel, op. cit., p. 11.

(2) *ibid.*, p. 11.

(3) Malthus on Corn Laws, *Edinburgh Review*, February 1815, No. XLVIII, pp. 491—505. しかし、この雑誌のマルサス批

判は、けつして経済上の利害関係からだけでなしに理論的観点からの批判をおこなっている。穀物価格はその売手と買手との契約によって定められる自然的基準(natural standard)というものがある。一国の農業はこの規制を受ける。もしこの基準をこえるならば耕作が基準価格をペイしない土地にまで拡大されるならばその耕作を許容するような高価格の穀物への需要はなくなる。もし農業が衰微して生活資料の供給がその国の需要に十分でなくなれば、基準価格が騰貴しそして耕作の進展は人民の欲求にまでも対応するようになるであらう。要するに、資本、工業および企業精神で冠たる一国が農業の衰微において商工業を盲目的に追求すべきである—ことばをかえれば、はらはらしながら贅沢品の供給をお

こない、そしてそのあいだは必要品の欠乏に飢え死にすべきである——ということほど一国民にとって根柢のない警鐘はないと結論を与えている。

他方において、一八一七年のリカアドウの『経済学原理』があらわれるや、この経済学原理のエッセンスを見事に紹介した論稿が一八一八年六月号の『エデンバラ評論』誌上に掲載された。この評論は同誌上二十八頁（五九—八七頁）にわたり、リカアドウ原理の紹介を試みている。それはリカアドウの穀物法案、通貨問題、および利潤論にかんする功績から説きおこし、自然価格および市場価格を規制する法則、価値、地代、労働賃金、機械論および課税論にいたるまで、その要点を紹介するというきわめて要領のよい論評であった。そしてリカアドウがはじめて確認した一般原理を称賛し、かれの理論は深遠でかつ論理的であると結論している。これはマカロックの筆に成るものであったが、かれはリカアドウ学説の無条件的追隨者であるとされた。かれは、一八一七年から一八三七年頃にかけて、この雑誌の指導的経済評論家として活躍した。かれは二〇年以上にわたって、この雑誌の経済評論について圧倒的權威をふるっていたのである。かれは、一八一八年リカアドウ『原理』の賛美的評論において、株式仲買人リカアドウをもつて「わが師」(my master)であることを公認した。リカアドウは、こうしてけんか好きな弟子をかちえたのである。そして、かれの残りの生涯において、リカアドウの経済学原理を發展せしめ、これに対する反対の燃えさしを踏みつけることに最大の努力を捧げたのであった。マルサスは、マカロックのリカアドウ賛美が余りに度をすごしていることにたまりかね、「この雑誌の論文のうちで、今話題になっている著作（リカアドウの原理——筆者注）の考えをこれほど完全に承認したものをみたことがない。」と皮肉ったほどである。しかし、マカロックの右のリカアドウ論評は素晴らしい効果をあげ、リカアドウ『原理』がその出版后までもなく売り切れとなり、出版元が第二版（一八一九年出版）を準備しなければならなかったという事実によって証明されている。<sup>(2)</sup>

(1) The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. P. Saffa, vol. 7., p. 278. 一八一八年八月十六日付書簡。

(2) *ibid.*, p. 337. 当時青少年向けの化学書をだして著名であったマーセット女史 (Mrs. Marce) は、彼女の『経済学問答』 (Conversation Political Economy) という著書で、スミス、マルサス、セエ、およびマルサスの四人をもつて、斯学の「偉大な師」とたたえていた。一八一七年にリカードウの『原理』あらわれるにおよんで、リカードウをもこの「偉大な師」のリストに加えた。

他方におけるマルサスの『経済学原理』(一八二〇年)の出版界における評価は、一部分はリカードウ理論の影響の結果として、リカードウのばあいとまったくちがっていた。リカードウは、かれの賛美者であるマカロックのマルサスの異説に対する非難を、是認した。経済学者マルサスは過大に評価されており、その名声に値いしないというマカロックの主張に対して、「マルサスのつぎの著作(原理―筆者注)を読んだ後に、私は、かれの経済学者としての能力が過大に評価されていなかったかどうかの判断を下しうることでしょう。私は、穀物法についてのかれの危険な異説は、貴下の到達した結論を正しいとする有力な根拠を提供していることを告白いたします。<sup>(1)</sup>」とこれを承認した。また、マルサス『経済学原理』出版直前にマカロックはリカードウ宛に書き送っている。「私はマルサス氏の著書を拝見したいと思います。かれは大事に取り扱う必要はありません。―かれがわれわれのいつわりのかつ排他的、体系の支持者に与えた援助は、それがいかに不愉快なことであるにしても、かれの誤まりを暴露するという仕事をどうしても避けがたくさせる次第です。」と。<sup>(2)</sup>

(1) The Works, vol. 8, p. 137, 142.

(2) *ibid.*, p. 167.

そこでマカロックは、『エデンバラ評論』において、マルサスの『原理』の批判的論稿を発表しようとしたけれども、編集者のジェフリーは断乎としてそれをはねつけた。この雑誌はすでにリカードウ経済学の共鳴板 (sounding



board)の役割を果していたとしても、マルサスもまたジェフリーの多年の友人でもあり、同誌に対する通貨および人口問題の寄稿家でもあったからである。しかし、マカロックの斗志は満々としており、ジェフリーの制止にそのまま引きさがっていなかった。かれはかれが主筆(一八一八—一八二〇年間)をしていた『スコツツマン誌』(the Scotsman)一八二〇年四月二十九日号において、マルサスをあしざまに批判した。リカアドウはこれを見て「多大の満足」<sup>(1)</sup>を感じたのであった。そしてその後、かれは、『エデンバラ評論』一八二一年三月号に発表された機械と蓄積にかんする論稿において、マルサスの有効需要論に攻撃を加えるのに成功した。<sup>(2)</sup>また、リカアドウ陣営の有力な論客であるトレنز(L. Torrens)は、かれがしばしば経済問題にかんする論文を寄稿していた『トラヴラー紙』(the Traveller)において、マルサス『原理』に対して三つの批判的論稿を発表した。かれがこの新聞に関心を寄せたのは、一八二〇年から一八二二年頃までのごく短い期間に限られていたにしても、J・Sミルによれば、この新聞は、「自由派のもっとも重要な新聞紙のひとつ」<sup>(3)</sup>であった。そしてリカアドウが、ハッチス・トラア(Hutches Trower)宛書簡において、かれのグループの指導者にふさわしく、きわめて鷹揚に、樂觀的表現をしたのはおどろくに当らない。「あるときにはひとつの原理を論敵に対して弁護し説明しなければならぬし、またあるときには別の原理をそうしなければならぬ。そして、私が正しいと信ずる見解が日々勢力をえつつあるのを見ると満足をもつています。トレنز大佐は正しい原理のもっとも正しい有能な唱導者のひとりとなりつつあります。……最近語りあったキング卿(Lord King)もまたそうですが、かれもまたわれわれの側に組み合っています。マカロックは『評論』<sup>(4)</sup>に自由貿易論弁護の一論文を印刷したばかりときいたが、それは立派なものとあえていいたいのです。」

(1) The Works, vol. 8, p. 178.

(2) ibid., p. 325. M. Blaug, op. cit. p. 43, マカロックは一八二〇年十二月二十五日付リカアドウ宛書簡で、エデンバラ市にお

る党派的感情の高まりを報じている。トリーは権力を独占し、ホイッグは才能と市民の大多数の信頼をかちえている。マカロックは自由な施政の前進を望んでいると報じた。

(3) G. S. Mill, *Autobiography*, p. 61. L. Robbins, *Robert Torrens and the Revolution of Classical Economics*, 1958, p. 4.

(4) *The Works*, vol. 8, pp. 185—186. 一八二〇年三月二〇日付書簡。

ところでマルサスは、こうした包囲作戦のなかにあっても、マカロックの経済学上の真理についてのヴィジョンを非難してやまなかった。かれがリカードウ学派に抵抗を示すばあい主たる武器となったものはセエ法則への批判であった。セエの販路説はまったく根拠のないものである。商品は商品とつねに交換されるということは誤りである。商品は生産的労働か不生産的労働と直接に交換せられる。この商品量はそれと交換される労働と比較して過剰のために価値が下落する。このばあいに明らかに一国の不生産的労働者が、資本の蓄積によって生産的労働者に転換せられたゆえに、異常な分量のすべての種類の商品が市場にあるであろう。しかし、労働者の数は全体として同一のままであり、そして地主および資本家のあいだにおける消費のために購買しようとする能力と意思とは、前提によって減少されているのであるから、商品の価値は労働に比較して必然的に下落し、延いては利潤を著しく低下せしめる。そして、しばらくのあいだより以上の生産を妨げるであろう。これがまさしく供給過剰 (*gluts*) である。しかもこのばあいそれは明らかに一般的 (*general*) であって部分的 (*partial*) ではない。マルサスはシスモンディの線に沿いつつこのように考える。しかし、マカロックは、一八二一年四月二日付リカードウ宛書簡で「シスモンディとマルサスの有害な秘策——こう呼ぶ以外に方法がない——と毒ついて斗志を示した。しかし、かれらの見解のちがいは販路説についてのみではなかった。外国貿易を主要な国富の源泉と認めることのマルサスの拒否、かれの高い穀物価格の支持、地主階級への同情および商業階級への疑問の徴候などがそれであった。最後には地代と租税にかんするマルサスの特殊

な見解があった。このマルサスとリカアドウとの見解のちがいは、マカロックをして、「経済学者としてのマルサスの名声ははなはだしく過大評価されている」といわしめた。さらにリカアドウへの書簡で「余りまじめに取り扱うべきではありません」といわしめたほどであった。これに対して、マルサス側でもマカロックの憎悪に満ちた批判を認め、一八二一年三月十二日付シスモンディ宛書簡において、「エデンバラ評論は政治経済学のリカアドウ体系をまったく採用してしまったので、貴下も私もその誌上で言及されることはないでしょう。私は貴著の書評が書かれかつ送られたことを知っていますが、それは、政治経済学の部門の主な著作家であり、かつリカアドウ氏の見解をまったく採用したと思われる紳士たちの影響によって、拒否されてしまったように見受けられます。しかし、貴下が親切にもお送り下さったシートで見事に論駁した論文は、トレンズという名前の別の論敵によって書かれたものです。しかし、一般に、リカアドウ氏の学説は若干のきわめて有能な人たちの心をたしかに抱えましたけれども、それは政治経済学の大部分のあいだにそれほど普及はしていないといわなければなりませんし、また私は、かれらの多くは査問と経験のテストに堪えないものと考えたく思います。」と抵抗を示したのであった。こうした『エデンバラ評論』の Ricardian Orthodox の機関誌的存在たらしめたものは、主としてマカロックのこの雑誌に対する支配性であった。かれはほとんど二〇年にもわたってこの雑誌の経済論文を実質的に独占した。かれはリカアドウの主張に批判的な論文はこれを除外して載せなかった。そしてリカアドウ学説を受容しようとしたくない人びとを非難してやまなかった。かれのこの雑誌への貢献は独創性に欠けていたし、かれの文章は優雅さに欠けていた。しかし、かれは編集者と読者の信頼をかちえたのであった。かれの分析の制約性とかれの信念の粗雑さにもかかわらず、かれはふるい秩序に倦き倦きしていた商工階級のあいだに人気を博したのである。かれの評論は与論に大きな影響を与え、この雑誌の評価をも高めた。かれはこの間、人口、救貧法、アイルランドの経済的状态、および外国の経済的状态といった問題を論

じた。ただこの雑誌の編集者ジェフリーは、この頃になってもマルサスに対する初期以来の友情を完全に放棄しなかった。この雑誌がマルサスの死後三年の一八三七年に、マルサスの生涯と著作を批判するというマカロックの提案をジェフリーがこれを拒否するという事件がもちあがった。すでに一八一九年にもマカロックは、「私はマルサスのそのあるべき評価に引きさげよう努めたいと思います。」と攻撃しマルサスに斗志を燃やしていたのであった。一八三七年において、ジェフリーの拒否にあつて、マカロックは、ついにこの雑誌への寄稿を断念してしまつた。かれの怒りが最高潮に達し爆発してしまつたのである。<sup>(4)</sup>

(1) セエ法則についての叙述はイギリスの文献史上シルのつぎの書が代表的なものである。John Stuart Mill, *Essay on Some Unsettled Questions in Political Economy*, 1844. ただし、この書は一八三〇年に書かれてゐる。なおマーシャルによれば、「供給過剰」(gluts)の理論について、一八五〇年から一八九〇年にいたる期間に新しいなものも加えられなかつた。<sup>(3)</sup> A. Marshall, *Principles of Economics*, 1936, pp. 710—11. M. Blaug, *Ricardian Economics*, pp. 80—101.

(2) *The Works*, vol. 8, p. 376.

(3) *ibid.* p. 139, 167.

(4) F. W. Fetter, *The Authorship of Economic Articles in the Edinburgh Review*, 1802—47, in *Journal of Political Economy*, June, p. 234. なにゆえにマカロックがこの雑誌との長いつきあいを断念してしまつたかについてはたしかな証拠はない。かれは「私がこの評論と最終的にわかれたのは、後者(ネーピア)の仕打ちによるものではない」と述べているが、しかし、以前にもマカロックがマルサスの著作批判しようとしたのをこの雑誌が拒否したことを考えれば、エンピソンがマルサスをきわめて好意的に論評していることがマカロックをして評論家としての隠退を考えしめたかも知れない。しかし、マカロックの隠退は、経済問題へのこの雑誌の影響の減退およびその論文の性格の変化と結びついていた。その論文のほとんどが経済問題を取り扱わず、それを取り扱つたものでもより一般的な性格をもっており、マカロックのような十字軍的情熱を欠いていた。このことはかれの隠退後、一八四一年のシーニアがあらわれるまでとくにそうであつた。その後十年ぐらいのあいだ、シーニアの寄稿はマカロック時代の趣きのある程度回復した。F. W. Fetter, *op. cit.*, pp. 240—241.

ところで、マルサスは、一八二一年人口原理にかんする「ゴドウィンGodwinのマルサス論」(Godwin on Malthus)を寄稿したのを最後にこの雑誌から遠ざかってゆく。そして、『季刊評論』(the Quarterly Review)へ近づくことを余儀なくされるにいたった。この雑誌はウォルター・スコット(Walter Scott)の指導のもとにロンドンの出版書肆ジョン・マレイと結んで一八〇九年に発刊されたが、保守党機関誌の性格をもっていた。その編集者はその創刊から一八二四年までウィリアム・ギフォード(William Gifford)であった。この雑誌ははじめ経済問題にほとんど関心を払わなかった。しかし、現実の経済問題が緊迫するにおよんで、次第に経済評論を掲載するようになった。しかし、この雑誌は新興の経済学に過度の信頼をおくことはなかった。創刊に当って、スコットはマルサスの評論がこの雑誌の性格にふさわしいものと考え、当時すでに著名であったマルサスをこの雑誌の顧問評論家として確保しようとした。一八〇八年九月七日付のギフォード宛書簡で、「マレイ氏はマルサス氏を経済部門のために考えておられるようです。」と述べ、そして「私が町にいったときマルサス氏を打診できるでしょう」とつけ加えている<sup>(1)</sup>。しかし、実際にこの雑誌の経済評論家となったものはロバート・サウシー(Robert Southey)であった。かれはマルサスおよびかれの人口原理に好意を示さず、むしろ人口原理を軽侮の念をもってみていた。他方のマルサスは一八二三年まで寄稿しなかった。『季刊評論』の読者にとって人口原理の残忍酷迫さは堪えがたいものにみえた。評論家サウシーはその感情をもっともよく代弁していた。一八一五年を境にしてマルサスが地主側の立場に立ったときでさえも、マルサスの理論への偏見は未だ余りに大きかった。しかし、全面的ではないにしても、部分的には、一八一五年に引き続く数年間に、人口原理に対する感情は次第にやわらいできた。一八一七年七月号にこの原理に同情的なサムナー(John Bird Sumner)の「マルサスの人口論」(Malthus on Population)があらわれ、一八二一年にはテーラー(George Taylor)の「ゴドウィンとマルサスの人口論」(Godwin and Malthus on Population)が寄稿された。マルサスの論文

があらわれたのはそれ以後のことであった。すなわち、一八二三年の「トークの価格高低論」(Tooke On High and Low Prices) および一八二四年の「政治経済学」(Political Economy) の二編がそれであった。

(1) B. Semmel, op. cit., p. 23.

(2) *ibid.*, pp. 145—208.

マルサスは、こうして、自己の立場が次第に不利になりつつあることを自覚した。しかしかれは少しもくじけなかった。むしろリカアドウ経済思想の優越性ないし支配性を認める寛大さをもっていた。一八二四年の「政治経済学」において、かれは、リカアドウ経済学、つまりは「経済学の新派の体系」をフィジオクラシイの学説に比較した。かれの考えによれば、この両体系の建設者はともに、もっとも異論のない天才であり、最高の榮譽に値する人間であった。これらの思想は、共通の観念についての不一致、推論の外形上の厳密さ、仮設上のデータによる計算や結論の数学的正確さで、きわめて目立っている。この体系と建設者の性格は多くの追随者を魅惑し、フィジオクラシイはほとんどあらゆる当時の経済学者をその影響下にもったし、リカアドウ学説もまたそれと同じく大きな支配的影響を与えるにいたった。すなわち、この体系と建設者の性格は、普通読者の能力の読者が有能な判断者によってさえも困難と考えられるものを理解したいという希望をかなえさせることによって、その忠実な追随者の数をきわめて増大させていたったのである。しかしマルサスは、イギリスの「新学派」の誤まりは、価値をもって需要と供給の影響を含意するものと解することをしないで、資本の相対的豊富さと競争についての見解に制約するところにあった、ときびしい批判を忘れなかった。

(1) The Quarterly Review, 1824, January, pp. 333—334. この「政治経済学」は左記に収録されている。B. Semmel, Occasional Papers of T. R. Malthus, pp. 101—208. この論文には「私」ではなく「マルサス氏」と三人称ででている。なお、マルサスとリカアドウの友情に満ちた交友についてはしばしば指摘されるところであるが、それについてはエンブソン

(William Empson) の説明をみよ。Life, Writings and Character of H. Malthus, Edinburgh Review, January 1837.  
B. Semmel, op. cit., pp. 233—234.

マルサスがリカアドウ学説に賛辞を呉した一八二四年は、Ricardian Orthodox の終局の発展へのひとつの指標に到達した年でもあった。それはベンサムの出資にかかる『ウェストミンスター評論』(the Westminster Review) の発刊の形であらわれてきた。この雑誌は『エデンバラ評論』や『季刊評論』への対抗の意味をもった哲学的急進主義の機関誌であった。J・S・ミルおよび第二世代の功利主義者たちは、リカアドウ・ミル・ベンサム思想を宣伝を任務とするこの雑誌に対して、非妥協的態度、俊烈さ、そして少しもゆるめることのない正統派意識をもって、一連の論稿を寄稿した。ジェームス・ミルの論稿が示した才能と熱意、その背後にある集団の団結、その売れゆきなどは、哲学および政治の分野におけるベンサム派の社会的地位に未だかつてその派が占めたこともなかった大きな位置を与えた。<sup>(2)</sup> しかもこの正統派はリカアドウ機械論の修正さえも拒否するほどの頑強さを示したのである。さすがのマカロックもたまりかねて、こうした思考はマルサスの有効需要論への危険な譲歩であると考えたほどであった。<sup>(3)</sup> ここ十年来、ミル・ベンサム・リカアドウ思想の不断の流れに対して十分のスペースを与えてきた『エデンバラ評論』は、それにもかかわらず、基本的には寛容なホイッグ的出版物としての性格を維持していた。功利主義はそれまでに急進的追隨者の一グループを發展育成させたし、『ウェストミンスター評論』は、こうした哲学的急進主義 (philosophical radical) の機関誌としての役割を果たしてきた。こうして、次第にリカアドウ主義は公認の思想の地位を獲得していったのである。<sup>(4)</sup> この派はベンサムを指導者に仰ぐという意味でのベンサム派ではなかった。むしろベンサムの思想を経済学の見方に結合させたものであった。マルサスの人口論もベンサムの思想に劣らず、かれらの旗じるしのひとつでありかつ一致点でもあった。ともかく、この雑誌を根拠にした論戦は、当時、新しい世代のもっとも教養あるひとた

ちの思想の動きを相当忠実に代表していた。

- (1) E. Halvey: *The Growth of Philosophical Radicalism*, 1952, pp. 483—85. J. S. Mill, *Autobiography*, p. 63. ff.
- (2) Mill, *Auto.*, p. 100. 朱牟田訳・九二頁。
- (3) *The Works*, vol. 8, pp. 381—86.
- (4) E. Halvey, *op. cit.*, pp. 483—85.

### III

リカアドウ経済思想の生成と普及の過程におけるジェームス・ミルの役割についてはこれを無視しえない。シュムペーターはリカアドウはなんらの哲学的思想をもっていないかったし、かれは多忙なかつ実証的な精神の持主であったという。そしてかれの研究方法の特質は、本質的には、時代がかれに提供した問題を捉え、批判によってかれが導きだした用具を手段として、これを考究するにあった。割り切った結論をえようとするとする点ではリカアドウはむしろケーンズともきわめて類似しており、かれら二人は精神上の同胞であった。<sup>(1)</sup>

- (1) J. Schumpeter, *op. cit.*, pp. 471—73. 東畑訳・(四)・九九四—九九六頁。

リカアドウは社会哲学の分野において誇るに足る特殊な能力を発揮しなかったことはたしかである。しかし、ジェームス・ミルの人を引きたたしめる人格上の魅力は、リカアドウをして重要な哲学上の問題に関心をいだかせ、結局において、リカアドウは功利主義の確固とした信奉者となったのである。リカアドウは、フランシス・ブレース (Francis Place) 宛に、「貴下と同じく私もベンサムとミル派の弟子です。」<sup>(1)</sup>と書き送ってそれを認めている。リカアドウは株式仲買人として人生をスタートし、社会改革家として生涯を終わった。かれの議会の仲間からは若干「空想的」(visionary)といわれる改革家とみられていた。<sup>(2)</sup>かれの提案した経済上の改革は、妨げられることのない自由市場経



済に対する信頼によって基礎づけられていた。かれはこの目的のために、イングランド銀行、穀物法、および団結法 (Combination Act) の独占力に対して強く反対した。国家保護による既得権益は許すことができないし、そもそも伝統主義 (traditionalism) はリカアドウのものではなかった。それはマルサスおよびかれの徒に属するものであるとされた。マルサスの理論は、過激な社会改革をおそれた保守主義者にとって、かれらが真実であると信じ、または真実であると信じようと欲したことを大胆卒直に代弁してくれたのである。「事実」 (status quo) を正当化し、実験をそらし、熱狂をさまし、かつわれわれすべてを秩序のうちに閉じこめておくところの、きわめて強力な知的基礎を提供するものであった。これに対してリカアドウはかれの思想をミルから学んだ。国債償還のための資本課税、普通選挙権のための倦むことのない要求、出版の無制限な自由と完全な宗教的寛容の主張などがその経済思想を特徴づけていた。こうした見解はミルとベンサム哲学からでていた。

- (1) The Works, vol. p. 52. ベンサムはあらゆる人間の行動を快楽極大化の原則から捉える。その点からいえば、「欲望と満足」または「効用」の観点から経済理論を構築すべきが筋道であろう。リカアドウの「収獲通減の法則」が近代経済学を志向していたように、ベンサムの「効用通減の法則」もそうであったはずである。ベンサムの弟子と名のつたリカアドウは労働価値論を基礎とした。かれはその点ではスミスの徒であった。ベンサムの快楽と苦痛の概念は経済理論構築のためのツールとはならなかった。その頃の経済理論の分野では客観的基準が牢固としていたと解すべきである。数学の武装を欠いていたベンサムであったが、同じくこれを欠いていたオースリア学派は効用理論を切開いた。O. H. Taylor, op. cit. pp. 142—145. 功利主義哲学と経済学との結合は J. S. ミルにいたって完成した。マルクス『ドイツイデオロギー』。(2) *ibid.*, p. 197. 一八二〇年六月十三日付マカロック宛書簡。
- (3) The works, vol. 5. 参照。リカアドウはもちろん自由貿易論者であったが、穀物関税の徹底的な引き下げよりもむしろ除々の引き下げを主張した。

リカアドウはミルと交遊をはじめ以前に公的問題に深い関心を示していたことはたしかであるが、しかし、ミル

なしにかれの『経済学原理』を書き、新しい経済学の正統派を創りあげたかどうかは疑わしい。ミルのような相談相手なしには、リカードウは、その当時の若干の経済上の特殊問題にしばしば参加する程度で終わっていたかも知れない。<sup>(1)</sup>ミルの助力をえてかれは重要な知的運動のための経済理論の権威となったのである。リカードウがかれの『経済学原理』を書き、議員に選出され、そしてあらゆる他の活動を政治的および経済的活動の正しい原理の普及に従属させるよう導いたのは、右の目的のためであった。

(1) ミルだけがそうであったわけではない。ホランダー(J. H. Hollander)によれば、「一団の友人や弟子を解説者たち——J・ミル、マカロック、トレンズ、J・S・ミル、マーセット夫人(Mrs. Marcet)、ド・クインシー——の知的な粘着力や抑えきれない情熱やまた宣伝者としての活動がなかったならば、経済学はけっしてリカードウの影響を、それが現におよぼした程度には感じなかったであろう。それらの人びとは即座に新しい教義に左祖して、それを広汎に流布した。」山下英夫訳『リカードウ研究』(昭和十六年)・一六二—一六三頁。

ジェームス・ミルはリカードウ経済学を読み易い一般に普及しうる形態に変えるのに大いに貢献した。一八二一年の『経済学綱要』(The Element of Political Economy)がその役割を果した。ミルはこの書をもって「経済学の教科書」または「斯学の梗概」を提供するためとなした。<sup>(1)</sup>そして、このリカードウ路線は、一八二五年のマカロックの『経済学原理』(Principles of Political Economy)によって継承された。マカロックは、リカードウのみならずジェームス・ミルを通俗化し普及化するものとされた。一八二四年のド・クインシーの『三法学生の経済学問答』(Dialogues of Three Templars on Political Economy)もこれと同じ伝統にあった。それはリカードウ主義が社会のあらゆる問題に支配性およびしていたことを示している。ボナーは述べている。「それはいかに完全にリカードウが学界の傾聴をかちとったのか、またマルサスの反対者がリカードウを正しいとすることいかに苦勞すること少なかったか、を示している。」<sup>(2)</sup>

- (1) James Mill, *Elements of Political Economy*, 3rd ed. 1826, Preface.  
(2) James Bonar, *Malthus and his Works*, pp. 266—67. 堀経夫訳・三六七—三六七頁。

ミルは、新しい経済学および政治哲学を普及するに当って、二人の友人を有効に利用した。そのひとりにはジェフリーであり、いまひとりはジョン・ブラック (John Black) であった。ブラックは、一八一七年以后、『モオニング・クロニクル紙』(the *Morning Chronicles*) に支配的勢力をおよぼしていた。<sup>(1)</sup> この二人は当時もっとも有力なジャーナリストであった。かれらの社会に対する影響力は大きかった。ミルは、『エデンバラ評論』が採用した正統リカアドウ的態度および『クロニクル紙』の改革的精神に対して、その責めを負うべき立場にいた。J・S・ミルによれば、「クロニクル紙は従来の単なるホイッグ党機関紙でなくなり、それからの十年間に、著しく功利主義的急進主義派の意見を發表する機関のようになった。」<sup>(2)</sup>

- (1) E. Halvey, op. cit., p. 301, 309.  
(2) Mill, *Autobiography*, p. 89. 朱牟田訳・八三頁。

#### 四

リカアドウ思想の伝播と普及の過程を顧みるばあい無視しえない重要なもうひとつの指標となるものは、大英百科辞典 (the *Encyclopaedia Britannica*) 五版、六版 および補遺 (Supplement) の編集者であったマックヴィ・ネピア (Macvey Napier) であろう。かれに対するミルの影響はおそらく決定的でなかったと思われるが、それにもかかわらず、リカアドウ派がその最大の勝利を記録したのは、その権威を誇ったこの辞典においてであった。ここでのリカアドウの勝利は完全であった。それゆえにこそ、寛大にも、マルサスもまた政治経済学の新学派のひとりとして、こ

の辞典の寄家たる光榮に浴したのである。<sup>(1)</sup> リカアドウ自身は、この辞典のために、『公債発行制度論』(Essay on the Funding System)を寄稿したのみであった。マカロックは、一八一八年から二四年にかけて、基礎的問題を取り扱った『政治経済学』(Political Economy)、『穀物法』(Corn Law)、およびより狭い標題の小論文を寄せた。<sup>(2)</sup> このうち『政治経済学』は一八二四年の第六版への補遺に掲載された。ジェームス・ミルは、『エコノミスト』(Economists)と『貯蓄銀行』(Saving Bank)について書き、また、政治論の分野における重要な寄稿家となった。

- (1) Quarterly Review, 1824, No. 9, p. 33. マルサスがこの辞典の補遺に寄稿したものは『人口論』(On Population)である。これはおそらく一八二一年九月書きはじめられたか、または一八二二に書かれたものと推定されている。そして、一八三〇年に些少の変更を加えられて再版された。そのときの標題は、つぎのとおりであった。A Summary View of Principle of Population, London, John Murray. これについては拙訳『マルサス人口論綱要』(昭和三十四年末来社刊)・一八三頁参照。なおこの原文は左記に収録されている。Introduction to Malthus, edited by D. V. Glass, 1953, pp. 117—181. マカロックはここでもマルサスに斗志を燃やした。マルサスが主筆のネピアに、リカアドウの学説が新説で未だ議論中であるから百科辞典に採用するのは慎重にせよと抗議を提出したのに対して、マカロックはあらあらしく答えた。マルサスの書簡をネピアはマカロックに送ったのである。「補遺は……ただ四五年前にあったとおりの斯学の見解を与えるのではなくて、それを改善しましたその範囲を拡めることを企図したのである」と。山下英夫訳前掲書・一六四頁。M. Baug, op. cit., pp. 40—41.
- (2)

大英百科辞典の製作史において、ネピアは学識において高い名声をもっている。ネピアの補遺は独創的な価値をもちすぐれた權威をもつ著作として著しい進歩を記録した。リカアドウ学派がこの補遺の経済学上の執筆陣として加えられたことは、かれらが当時もっとも確立した科学的見解の代表者であった証拠と解することができるであろう。この辞典へのかれらの登場は、かれらにさらにいっそうの榮与と權威とを与えることになった。ネピア自身は学問上の功利主義者ではなかったけれども、しかし、そのことがリカアドウのミル思想にとってかならずしも不都合であった

ということはないであろう。しかしながら、一八二九年ネピアが『エデンバラ評論』の編集者となったとき、かれは、ジェームス・ミルやその他の『ウエストミンスター評論』の寄稿家を、その極端な見解のゆえに、攻撃した。

ところで、リカアドウ学派が当時の経済学界において主流を占めたといっても、かれらが斯学のあらゆる問題について一致した見解を示したかという点、かならずしもそうではなかった。多くの理論的諸問題について、とくに価値の問題について、しばしば見解の不一致が露呈された。トレنز大佐は、一八四〇年代半頃シーニアとの論争の過程においてリカアドウ正統であることを強く意識するにいたったとしても、かれはリカアドウ『原理』第二版出版直后においてその価値論批判をおこなった。<sup>(1)</sup>これは、ミルによれば、新しい思想の高い価値をもつ公的なやりとりであった。かれはまた、ジェームス・ミルの利潤論批判という形でかれの「偉大な師」リカアドウを批判した。<sup>(2)</sup>ロングフィールド (Longfield) がまたこれに習うにいたった。しかし、基本的な政策上の問題や理論上の問題の多くについては、リカアドウ派はつねに見解が一致していた。経済学にかんするマルサスの思想に対しては、かれらは隊伍を組み、マルサスの影響阻止のために、出版物を独占的に利用してこれに立ち向ったのである。リカアドウ学説は、そのライバルの思想に比べるとき、経済学における新正統派としてのリカアドウ主義を確立する点において、概して成功したいといつてよい。この学説は、有能で精力的な著作家たちの一陣営によって、著しく推進されたのであった。こうして、リカアドウは、かれに指揮を仰ぎ、転じてはかれの意見を擁護するようなサークルの中心的存在となるにいたった。かれの教えるところは、斬新なものとして確立され、そして他のすべてのものは、劣っておりかつ朽ちておりそして陳腐なものとされたのであった。とくにリカアドウは、貿易、貨幣、および財政政策について有効な解決を与える、首尾一貫した包括的な分析体系を、与えた。包括性と首尾一貫性 (consistency) は理論における魅力的性格である。これに反して、マルサスのリカアドウに対する反対は、技術的にも未熟でありかつ理論構成において嚴密さを欠いて

いた。さらにその知的魅惑において劣っていた。リカアドウの論理はかれへの称賛と傾倒との重要な源泉となったが、マルサスは最悪の理論家とみなされた。たしかにリカアドウは、誤ったことの少ない論理的かつ知的な不撓の精神をもっていた。リカアドウの文章も悪文で理解に困難であるとされたけれども、マルサスに比べると、かれの理論構成は一般について厳密であり首尾一貫している。これはかれら二人の研究方法のちがいに因るであろう。リカアドウは問題を少数の要素に還元したがマルサスは多くの要素に還元した。そして前者は理解より容易であったから、容易に真実により近いものとされた。ド・クインシイは、マルサスの理論上の「矛盾撞着」(inconsistency)を軽侮の念をもってさえこれをみたのであった。<sup>(2)</sup>産業資本の優位という外的条件の成熟という点を別としても、リカアドウ理論そのものの資本主義社会分析の用具としての優位性を忘れてはならない。つまり、リカアドウの経済学に対する実際の貢献は、その内容というよりはむしろその方法に存していた。かれは議論によるよりもむしろ主として実例によって、経済学的研究を実証科学の列に加えた。そして、かれは研究の分野を論理的正確さをもって考察し、それを科学的精神をもって開拓した。かれ以後、経済学研究は、意識的に論理的方法によって一定の主題を分析するにいたった。かくて、われわれは、リカアドウ経済学がなにゆえにヘゲモニーを掌握するにいたったか、さらに逆にいえば、なにゆえに「反リカアドウ的伝統」(anti-Ricardian tradition)が失敗に帰したかの問題を、二つの側面から跡づけることが可能である。すなわち、そのひとつは、リカアドウ経済学説そのものに内在する理論的優位性とその知的力がそれであり、その二は、産業資本の優位という社会的条件の成熟がこれである。急激な産業進化の段階に当り「貴族的土地所と産業資本との斗争」が熾烈化するにおよんで、資本蓄積と分配の問題を体系的に解明しようとするリカアドウ経済学が一般に訴えるところ大きく、かつ實際上重要な意義をもったことはたしかである。この点においてリカアドウはいかなる競争者をもたなかった。しかし、リカアドウの命題と現実の予態との隔難が次第に大きくな

るにおよんでもなおかつリカアドウ経済学の命脈が保たれていた点もまたこれを認めざるをえないであろう。しかし、穀物法が未だ残存している限り、リカアドウ経済学もまた存在の意義をもっており、舞台からまったく消え去ってしまうわけにいなかった。かれの経済学は自由貿易論という死活的な政策問題に関係をもっており、その一定方向の行動に合理性を与えるものであった。リカアドウ経済学を拒否してしまうという事態には、自由貿易が危たいに瀕するであろうという大きな不安がつきまとっていた。広範な現象によりすぐれた命題を提供しうる、リカアドウ経済学と同様の実際的重要性をもつ理論構造があらわれてこない限り、リカアドウ体系をその骨組みにおいて保持しようとするあらゆる努力が継続されたことは思想上つねにみられる現象のひとつであった。しかしリカアドウ経済学は「自由貿易」および「政治経済学」と三位一体的に固く結びあっていたゆえに、「自由貿易」の達成とともにその実際の意義を失ったと解することも可能である。そうすれば、J・S・ミルがリカアドウ経済学の重点のおきどころを少しく左よりに変えるということがなかったならば、ミルの『経済学原理』のでた一八四八年をもってリカアドウ経済学終焉の年といいうるであろう。しかし、そとぎすでに、伝統の重さはその特有の惰性を獲得してしまっており、これが反リカアドウ的潮流をジェボンスがあらわれるまでなお二〇年のあいだせきとめたのであった。<sup>(3)</sup>

- (1) The Works, vol 7. pp. 315—316, L. Robbins, op. cit., pp. 61—62. トレンズは、一八一八年二月号の『エデンバラマガジン』につぎの論文を寄稿して、リカアドウ価値論を批判した。これが後のリカアドウ『原理』第二版以後の修正の主たる理由となった。 Strictures on Mr. Ricardo's Doctrine respecting Exchangeable Value. この論文があらわれるや、リカアドウに忠実なマカロックは同誌十一月号にたちまち反駁の論文を寄せた。トレンズはこのほかリカアドウと異なる貨幣政策を考えていたし、そのために地金プランにも反対を表明した。そしてイングランド銀行をも批判した。この点についてはロビンスの書を参照。 L. Robbins, op. cit., pp. 90—93.
- (2) Morton Pagin, op. cit., p. 138.
- (3) M. Blaug, op. cit., p. 229. ブラウグはまた一八三一年の「経済学クラブ」の会合におけるリカアドウに対する一般的態

度を紹介している。マレット (Mallet) による要約を記しておこう。これは一八三〇年頃におけるリカアドウ経済学の評価として注目すべきである。「トレンズは、リカアドの著作のあらゆる偉大な諸原則はつぎつぎに放棄され、かれの価値、地代、および利潤の理論は今では誤っていると一般的に認められている、と主張した。価値については、一八二五年にベイリイによって出版された価値尺度にかんする論文がこの問題を解決した。タムソン (Thompson) が地代は土壌の相対的生産性のちがいの結果でなくて需要と価格の結果であることを、そして利潤についてもそうであることを示したので、投下資本を置きかえるための部分——それをリカアドウは考察しなかった——はかれの見解の不健全さを決定的にした。トークとマカロックは最後の観察の真理を承認した。トークはまたリカアドウはその価値理論で誤っていると考えたが、しかし二人とも、地代は事実上、土壌の生産性のちがいの結果であると考えた。……マカロックは価値も地代をも熱心に弁護した、そして、リカアドウにきわめて高い賛辞を呈した。かれはリカアドウを未だにたいがいの点で正しいと考えていたし、あらゆる点で斯学に最大の貢献を与えたと考えた。……リカアドウは、同じことばをちがった意味で用いた、悪しきかつ曖昧な著作家であることが、一般に認められた。しかし、かれの諸原則は主要な点で正しいことが認められた。かれの価値理論もまた地代および利潤理論も、かれの命題の条件そのものにしたがえば、正しくない。しかしそれらは原則において正しい。」 *ibid.*, pp. 62—63. *Political Economy Club, Centenary Volume, Minutes of Proceedings*, London. 1961, vol. 6.